

水 別れの盃 小林残水 西郷隆盛 谷津社
 水 雪晴れ 三輪花水 川中島 丹野鯉水
 長篠の露 神藤歌水 屋島の誉 阿部勝水
 山岡鉄舟 水谷浩水 本能寺 奥村慧水 (以下
 来賓) 粟津ヶ原 前田旭城 長谷川旭鶴
 ひめゆりの塔 内田景水 羅生門 田中訴水
 道成寺 館谷六水。

各派琵琶名人 十一月六日(木)夕五時東京
 競演大会 日本橋第一証券ホール。主
 催加藤錦陽氏(一〇〇〇円)。白虎隊 平賀
 桜翠 竜の口 加藤錦陽 石童丸 石田脩水
 恩讐の彼方へ 長谷川錦舟 長柄の秋風 原
 島旭粧 扇の的 新部桜水 川中島 押川旭
 葉 大物の浦 若宮旭登 戦艦大和 若水桜
 松 鉢の木 遠藤鶴東 曲垣平九郎 木原綾
 子 茨木 都錦穂 道成寺 広瀬翠紅。

第七回琵琶名流 十一月九日(日)十一時浜
 演 奏 大会 松市西遠荘ホール、主催
 薩摩琵琶鶴彦会、東西の名手グスト出演で盛
 会。金剛石 川口 太田 菅公 謡琵琶員
 吉野山 懐古 竹原 早川 児島高徳 佐野
 さくら 高林 槍木 武蔵野 染谷 由比正
 雪 青島 花紅葉 伊藤 姫百合部隊 柿沢
 箕峰 似我 大石 城山 三上 あゝ宗長親
 王 会主 小野鶴彦 (以下来賓) 扇の的 矢
 吹旭美津 水天門 平井春嶺 小教盛 岡尾
 鶴城 白虎隊 仲川秀邦 赤穂義士 普門義
 則

錦心 祭 十一月十日(月)朝十時東
 一水会全国大会 京銀座ガスホール、主催
 一水会本部。流祖永田錦心師逝いて来年五十
 周年を迎えるがその前年祭を兼ね例年の全国
 大会が開催され五十数支部の内北海道から神

戸迄の四十支部並びに本部からの出演で覇を
 競い盛況を呈した。尚開演に先立ち錦心師の
 胸像及び肖像画の除幕式が厳粛に行われた。

鯖江市文化祭参加 十一月十六日(日)昼一
 錦心流琵琶演奏会 時鯖江市市民会館二階大
 広間、一水会福井支部・洲水会共催。月下の
 陣 西川 城山 内田 姫百合の塔 杉本
 会津白虎隊 山本 常陸丸 山脇圭水 羅生
 門 岸本港水 石童丸 星山溪水 川中島 1
 村田知水 熊谷蓮生坊 細田辰水 終戦回顧
 1 西川磯水 安宅の関 坂井旭蘭 血染の聖
 教 1 会主 内田景水 白虎隊 丹野鯉水 本能
 寺 1 田中篁水 木村重成 1 水谷浩水。尚福井
 支部長吉野洲水氏は病氣療養中のため欠席。

山崎旭萃 十一月二十三日(日)昼一時大
 リサイタル 阪高島屋七階。(次号詳報)
 平野鉦水 十一月二十四日(休)朝十時返子
 演奏大会 市立図書館。(次号詳報)

日本の芸能近代化 十一月三十日(日)昼夜
 特別公演 二回東京虎の門国立教
 育会館。琵琶「恩讐の彼方へ」外(次号詳報)
 岡部 錦蝶米寿 十一月三十日(日)正午
 祝賀記念演奏大会 大阪西区科学技術セン
 ター八階大ホール。(次号詳報)

晴風会 十一月三十日(日)朝十時半東京
 秋の大会 中野文化センター、主催浅野晴
 風氏。会員の外賛助出演五氏。(次号詳報)

(予告)

○京都琵琶協会十二月集会 十二月三日(休)
 午後二時嵐山渡月橋北詰に集合、晩秋の附
 近景観を鑑賞後三時半から中の島の料亭「
 錦(にしき)」(阪急電車嵐山終点下車す
 ぐ)で月例茶話会を兼ね忘年会を開催。(雨
 天の場合は三時錦に集合)。
 ○京大法学部歌風会公演 十二月六日(出)午
 後京都府立文化芸術会館。琴、尺八等の邦
 楽器に坊寺旭清氏が筑前琵琶で加わりダ
 ンスコンサート曲を発表。(有料)

あ アツと云うまに又一年が過ぎ去る
 うとしていた。今年こそは、と殊勝
 にも年の始めに考えていたのに、と
 うとう何とも出来ずにあと一ヶ月でま
 た一つ齡をとることになるらしい。十月、十
 一月は我が琵琶界の活躍も素晴らしかったが
 十二月ともなると流石に一段落の感があり本
 号の予告欄も淋しい、来年の奮闘を期待した
 い。年賀交礼のお申込み精々多数の御協賛を
 お願ひ申上げる、お名前を見てそのお顔やお
 姿を思い浮かべながらお互いの健康を祝し合
 いたいと思う。よろしく。

昭和五十年十二月一日発行(非売品)
 編集者 植村 稟水
 発行所 京 紘 社
 〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三
 電話 〇七二六(八五六〇五一)番

琵琶 機関紙

京

紘

第二五八号 京 紘 社

弘仁の昔を偲ぶ 苅萱堂

附・高野山の七不思議



旭城

日本の歴史をひもどけば、九世紀の始めに
 弘法大師があらわれてから、霊場高野山は色
 々な面で歴史の表面に出てくる。中世に弘教
 が強い行政に発言力をもっていて政治を動か
 すこともあった、云うまでもなく、これは真言
 密教の大本山、むづかしい教理は預けておい
 て、高野へ上るといえば世を捨てることの代
 名詞でもある。昔はいろいろな面で人生に行
 詰った人々が高野の山に籠った。

苅萱堂は密蔵院の前、遍照院の向い側にあ
 る小さなお堂で、筑紫の国の守護職加藤左衛
 門繁氏が、無常を感じ出家して草庵を結んだ
 古跡である。

加藤繁氏は筑紫苅萱の領主で、説話による
 と、正妻の外に側室があったが、表面は二人
 とも仲が良く互いに相手をいたわり合ってい
 たが、ある夏の日のこと、座敷で二人が昼寝
 をしているのを、何気なく繁氏がのぞくと、
 二人の髪の毛が蛇となって戦っていた。繁氏
 は今更ながら女心の浅ましさに、そのまゝ家

を出て高野山に上った。

あとに残された奥方はその後石童丸を産ん
 だ。父の顔を知らぬ石童丸は、母と共に高野
 山に居るといふ父を尋ねるが、女人禁制のた
 めやむなく母を麓に残して一人で山へはいり
 だが父の苅萱道心は、我が子と知りながら名
 乗ることが出来ず帰してしまふ、麓に帰って
 みれば、母は石童丸を待ちかねて死んでしま
 っていたので、石童丸も世の無常を感じて再
 び高野山に登り出家するという物語が、琵琶
 歌「石童丸」によって語りつがれている。

ところで、日本国の東と西とで死者の靈魂
 が集まると云い伝えられる山が二つある。そ
 れは下北半島の恐山と紀州高野山である。
 赤裸の山肌、今にも火を噴き出しそうな恐
 山に比べて、高野山はいかにも鎮魂の山にふ
 さわしく、触れなば染まるばかりの緑りに覆
 われてすがすがしい。仮りに幽冥界にも明暗
 があるとすれば、血の地獄を象徴する恐山に
 対し、高野山は明るい極楽浄土の容姿をして

「高野の七不思議」は、どのような時代を
 背景にして生まれ、またいつの頃から語りつ
 がれて来たのかは判らない。そして茫々と過
 ぎ去ってゆく長い歲月と共に、今はもう消え
 去ろうとしている。

さて七不思議の数え方は人によってまちま
 ちで、実際には体系だつた決定版というよう
 なものはない、然し山上で語り継がれている
 七不思議の一つ一つには、根強く生きてロマ
 ンが底流し、霊山にふさわしいベイスンに満
 ち溢れている。高野山とは別に、仮りに恐山
 にも七不思議があるとすれば、それは恐らく
 最大の陰惨且つ気味悪いものであるろう。

一昨秋筆者は芸友中川君と共に高野山に上
 り、宿坊の老僧に夜おそくまで取材を主眼と
 して聞いてみた、その七不思議を纏めてみる
 と、それは数えて三十不思議ほどになり、こ
 れを幾通りにか分類すると、土地や場所に関
 わるもの、天然現象に関わるもの、伝説など
 のものになるようだ。そして更にそれらを東
 と西に分けると、七不思議の条件は「なぜ」
 「どうしてそなのか」という疑問が裏打ち
 されていなければならぬ。

東では、一度山に入ると再びこの世に帰る
 ことが出来ぬと云われる「姑射山」、背に焼
 串の跡がある王川の「串魚」、石段が四二(二
 死)を越える四十三段の「かくはん坂」、姿
 が映らなければ別名三年坂と云い、三年以内
 に死ぬと云われる「婆見の井戸」、諸人の罪

一身に背負い年中汗にまみれている「汗かき地蔵」、大蛇を封じて柳に変えた「蛇柳」、日が暮れると「暮六ツまだか」の音が聞こえる「幽霊坂」等々。

西の方では、六時の鐘の石垣に噛ませた「石川五衛門のかすがい」、不浄の者は鱗を逆立て、通さぬ「蛇腹道」、丑満刻になると通る人に砂を撒く「会堂坂」、真夜中に通行人を送って行く影法師の「三角池」、いつも血の色に濁っている伽藍の「血の池」、天狗の羽音が聞こえる「寛海杉」、弘法大師の手形と足跡のある「押上岩と四寸岩」等々。

これらが東西の代表的七不思議で、高野山は石童丸の哀話と共に七不思議もまた長く語り継がれることであろう。

私の音楽ノート(一)

水藤五郎



「芸は人なり」と云う。私たち芸にたずさわる者にとっては、真に耳の痛い言葉であります。その意味や定義について考えることは、芸にたずさわる人にとっては、人生哲学の命題に挑戦するようにさえ思えます。若く、活気に溢れた年令の人に依る芸、人生の多くを

経験して枯淡の境地に達した年令の人の芸、この二つの芸の相異は誰の目にもあきらかです。明るい人の芸、暗い人の芸、この二つの芸の相異もあきらかです。

しかしながら、現実の人間は明るい面と暗い面、若くても活気がなかったり、老いて益々盛んであったりして、複雑で微妙であります。芸をやる時は明るくユーモラスであつても、実際は静かで内気な性質の芸人がいます。喜劇人にはよくあるタイプです。これとは逆に悪役を演じさせたら名人と称せられる役者が、私生活では極平凡な涙もろい人情家であつたりします。この時点で於ては、その人の芸から人間性をさぐることはむづかしい様であります。ある意味では逆探知される様な芸人では、所詮成功しないのかも知れません。

悪役になり切つたり、自分に適さないと云うよりは、自分にない役づくりをしてこそ芸としては本物と申せましよう。俗に云う、その人の性質が頭われると云う意味での「芸は人なり」は、全面的には妥当でないと解されます。この言葉は仲々むづかしく思えます。

よくアマチュアの方々の「ど自慢」番組に登場する人に見られるのに、その人の職業や生活がにじみ出てくるものがあり、私達聴き手にとって何とも云えぬ楽しさを与えてくれることがあります。民謡でも流行歌でも小唄の会でも、それが楽しみで聴くことがあります。のんびりしたお年寄りが如何にもゆったりと語り民謡、せかせかと体を動かす若い

流行歌の出場者、これらを見て、あゝこの人は呑気な人だな、この人は気の弱い人だなと芸からその人を判定出来るのです。これを定義すれば「人は芸なり」と云えるでしょう。則ちその人の性質や心情が生地のまゝで芸にあらわれてくる。芸がその人の体の中で、才能の中で占めているパーセンテージが低いのです。これがアマチュアの悪い処であり、そうでなければならぬと思えます。これを失なつてはいけません。しかし芸をその人の体の中、心の中で大きく比重を置いて

いる場合は、プロとしての芸に於ては「芸は芸なり」であり、「人は人なり」であります。飽く迄も芸は確固としたものでなければなりません。

然るに落語の名人故文楽師匠の名言「長生きも芸の内」と云う境地は、この二つを超越した、つまりプロとアマとを乗り越えた芸そのものが人であることを教えて呉れます。ここに至つて、芸は人なりが意味をもつてくるのです。ある時は若い潑刺とした人を演じ、ある時は七十才、八十才のご隠居を演じて、それが生々としてあらわれる。明るい人も暗い人も、善人も悪人も演じ分ける、この人間の微妙なあやそのものが芸になり、芸がそのあやを生む、これが真の「芸は人なり」でありましよう。

近頃のテレビに於て、かつての時代劇の悪役名人が、ホームドラマの善良な人物に扮しているのをしばしば見かけます。一度目、二

度目の内はいつか裏切るのでは……という疑いをもつて見ていた私達も、その扮する人を見馴れるのと共に、いつしか善良俳優として信じてゆきます。これは私達だけの立場であつて、演じる役者にとっては迷惑な話なのです。彼等の芸は「芸は芸なり」であるのであります。善良な役だから、悪役だから、と考へるのは、この「芸は芸なり」に徹する彼等の名演技に、ついつい迷わされてしまふからであります。人は芸なりの論理で「芸は芸なり」を解明することは出来ません。

プロの少ないと云われる琵琶界に在つて、私達が楽しめる芸が少ないのは何故なのでしょう。人は芸なりであるとするれば、これは問題です。会社の重役がゆつたりとしたり泣いたり小唄や、農村の情感をしみじみと感じさせるお年寄りの草刈唄をふと耳にする時、若さに溢れた労働歌を聞く時、何とも云えない喜びを抱きます。これこそ芸に一生遊ぶ、人は人なりの姿であつて、その人々の生活の人の柄のあやが浮きぼりにされてきます。落語と歌舞伎に接するとき、芸に学ぶ二十代、三十代の芸、芸に生きる四十代、五十代の人々、それらを超越した芸に遊ぶ名人芸の人々等々を見る事が出来ます。一生が芸修業です。今日琵琶界に在つて登場して来る人々、登場して来た人々にとって、芸に對する態度がもう一度省りみられなければなりません。年令に合わせて、心構えに合わせて、学ぶ、生きる遊ぶ等を選択して他の立場への協力を忘れずにしたいたいのと思ひます。

我が道を行く

六十五年 (三二)

西郷 天風



明ければ大正九年の正月だった、不安定な芸能生活に青春を賭けてしまふことに迷いを生じていた矢先、この大失態で漸く心機一転かねてから心にかけていた織物業界に君臨する図案家の生活を思い出し、それまで琵琶生活の乏しい財力を傾けて画の勉強を続けてきたが、今度は逆に画筆によつて得る財力を琵琶研究に打込まんと決意し、曾遊の地足利に於ける屈指の機業家「永仙」の若旦那に意見を問えば、昔では琵琶大家を夢みながら中途機業家に入籍した彼は、我が意を得たりと云わんばかりの賛意を示し、手にしたばかりの着尺図案数枚を参考に見せて呉れた、それは模造紙八ツ切の台紙に葉書二枚大の図案を貼付けた、一見本物の布切れと思われる程見事な出来ばえの作品だったが、私にはこれ位ならと云う自信がもて、早速草花をあしらつたや、洋画風の作品を持って再び訪ねたのが二日後のことだった、併し着物の図案としては勝手が違ふと云うので、何よりも数多くの現物に接する事が早道とばかり、其翌日から「永仙」方に住み込んで数人の中僧達と毎日一千余の反物を、庭先の倉庫から奥座敷へ運び入

れ、午后は品質調べや正札をつけ終つた反物を別の倉庫へ運ぶ等、数十回の往復は中々重労働で、朝六時には食事を済ませ夕食七時迄の間昼食時を除いて殆ど無休、その永い時間の重労働は経験のない私にとつて相当な苦行だった。しかもこの時間中は一家総ぐるみの多忙時で、六日に一度の時計を巻く隙もなく特約の時計巻屋が三個の時計を巻いて来る、それが商売になると云う話に驚いたのが最初だったので記憶にある次第だが、それ程多忙な中では身体に少々不調があつてもそれを訴える隙もなく、生れて二十余年来朝食は七時、十二時の昼食後は五時間位で夕食となり、主食は三杯と定められて育つた私は、この長時間の重労働で十一時には既に極度の空腹を覚え、昼食には十二分の腹こしらえを予定しながら、いざとなると永年の習慣で三杯以上は半腕の飯も胃が受けつけず、夕食の七時頃には「ぬまい」を感じる程となり、何として一杯ぐらひは多く喰わねばと努力するが、馴れた量以上は咽喉を通らない。そうこうする内一週間以上の便秘で歩行すら困難の状態となつてしまつた。

医師の診断によれば、腹部の模様が今にも下痢する状態にあるからとて、一旦帰されたものの現実はそう簡単ではなかつた。翌朝医師は如何にも不審顔でヒマシ油一回分を呉れ帰つて一杯の茶と共に嚥下すれば忽ち射出すること迄の如く、そのショックで遂に病床の客となつてしまつた。

「水仙」では多忙の中から使を走らせ近所の堂々たる屋敷の離れを借り受け、私は其処で養生することになった。

その主人は元機業関係の技術者で、以前不況時代に失業し台湾に身をひそめていたが、当時台湾政庁発行の富くじ一等に当選し、数万の賞金をみやげに立戻り「水仙」の近くに屋敷を構えておる職人気質の好々爺で老夫婦だけの暮しだった。

数日にして回復した私は、静養かたがた数年前の門弟達を呼び琵琶の稽古を初めたが、その中に異色の弟子が二人おり、一人は足利駅の助役で、他の一人は絹糸商の主人、いづれも私より相当年上だった。

この絹糸商の関氏は伊勢崎町の絹糸問屋関商店の足利支店を司どる中々の敏腕家で、義太夫の名取りでもあった。従って琵琶を扱うにも常人と異なりその音締や余韻の運び、歌中の対話や道行の部分等にふさわしき節を工夫するなど、却て教えられる所が多かった。

亦駅の助役氏は職掌柄か中々の人気者で芸の上達も早かった、漸く初弾法が了った直後頻りに門徒の伝授を乞う。その熱意に負け稽古に当ってみれば其上達目醒しく、日ならずして私との合奏も堂に入ったものとなるや忽ち大衆の前で披露を試みるべく私に無断で会場を取り、演奏会を懇望する始末となつてしまつた。しかも満員を保証する彼の自信は絶対的であつた。

私がこの足利で演奏会を催すのはこれが初

めてで、いさゝか不安なきに非ざつたが結果は彼の予想をも上廻る大盛会だった。その直後水戸の演奏会に出演した私は歓迎会などで数日後帰郷したが、玆に意外な衝動にかられ処置に迷つた事がある。それは留守中に紋付の着物、袴等一揃いの贈り物が某仕立屋から届けられたが、私の帰りが遅い為返して仕舞つた、贈り主が町の芸者と判つたからだと云う、私の将来を案ずる老夫婦の善意だが、之も助役氏の顔によるものと思えば少々心残りでもあつた。

日本人に好まれる話もあまりあるまい。「菊と刀」のルーズベネディクト女史らに云わせると、日本人特有の「義理」物語で、西欧人には不可思議の話のようだ。また民主主義の法治国家であんな封建的で無法な復讐話を讚美するのは怪しからん、と否定的な人もいるが、戦後も何度か芝居やテレビの題材になり、その都度立派な成果を挙げているし、琵琶演奏会でも必ずと云つてよいほど一つや二つは赤穂義士関係の曲目が取上げられているのを見ると、余程魅力があるからであろう。



志賀 一

十二月十四日は赤穂義士討入の日となつている。芝居、映画や琵琶で演じられる内容と実際の事実との間には可成りの相違もあるようであるが、これくらい長い年月にわたつて

この恥辱に耐えて漸く暗れの朝を迎えた。浪士達には本懐を遂げた悦びと、今こそ本當の自分の姿を示すことの出来る誇りがある。弱々しく見えた町人が、一夜明ければ凛々しい勇敢な武士の姿に変わっているのだ。見られる方は勿論、見る方もジーンとくる。

ると天下の副将軍に变身する。琵琶歌の「黄門漫遊記」でも仲々評判がよいが、この「何を隠そう」という変身の物語が聴観客に受けるのである。

勸善懲惡の物語は外にもいろいろあるが、苦勞に苦勞を重ねねらゆる迫害に耐えた場句ようやく本懐を遂げた赤穂義士や、一見何の変つてもない好々爺の田舎爺さんが、こゝといたうときにその正体をあらわして悪を懲らしめる筋書き、或は桜吹雪刺青の街の金さんこと北町名奉行遠山金四郎などの話は、たとへ根も葉もないフィクションであるにしても、正義感の強い日本人には共感を呼ぶ好資料であらう。

ついでながら、今日なお不可解な謎を残す元禄刃傷事件に登場する吉良上野介が、我が領土參州吉良ではあらゆる善政を敷きながら大石内蔵助以下四十七士の壮挙を盛り上げるために、格構の悪い徹底した悪役にされているという人物も又少ないのではあるまいか。

言 (29)

三條実美

藤原鎌足十一代で閑院家の祖にあたる。父は前内大臣実萬で天保八年(一八三七)京都梨木町生まれの生粋の京都人。明治維新の大立者で、後に位人臣を極め国葬された。琵琶歌「七脚落」の一人で梨木神社に神としてまつられている。

邦楽木犀会

第一回演奏会を聴きて

宮城県 吉田 清幸



普門義則氏を中心とする邦楽の若手演奏家研究者のグループ木犀会は、九月二十七日(出)東京日本橋第一証券ホールにてその演奏会が開催された。邦楽と云うと古いと云うイメージが先づ浮かんで来るが、この会を聴いて全然その様な感じがしなかった。一つにはこの会は現代音楽をも修得した芸大出身の若手の人が多く、他の演奏者も夫々の道の一流の方々のみで、古いとか新しいなどと云うものを感ぜさせない演奏振りであつた。又入場者は補助椅子を必要とする程多数であつたが、心から音楽を鑑賞し静かな落ちついた雰囲気の良い演奏会であつた。

雅楽の楽器及び奏法に関する解説、その後の質問に応じられたのは、古典音楽の理解を深める上に役立つ主催者側の心配りが感じられた。又質問は仲々活潑で、聴衆の方々の音楽に関する造詣の深さが窺われた。

淵落の感の深い邦楽も最近少しずつ見直されておるとは云え、この様な会の誕生と演奏会が度々催されることを希つて止まない次第である。

明年一月一日発行の本紙は例年の通り正月特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて新年交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

新年特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え十二月十日迄に御申込み願ひます。

感想



去る九月二十一日開催の京都琵琶協会主催秋季演奏会に対しファンの方から左の感想文が本部宛寄せられたので参考のため掲載する。外に電話で二人の方からも大同小異のお言葉を頂いた。一係！

初秋の候貴協会益々隆盛の段およろこび申し上げます。毎回すばらしい演奏会をお開きいただき、愛好者の一人として厚くお礼申し上げます。二十一日も一番に寄せていただき終日ウットリいたしました、大満足の主婦宅いた

筑前・薩摩琵琶 十月十九日(日)昼一時松
 秋季演奏大会 山市民会館三階ホール、
 主催愛媛琵琶連盟。扇の合奏：旭悠鳥・旭
 秀・旭佳・旭優・旭好・旭都 吉野一都松
 青の洞門：都芳 扇の的：好華 菅公：藤山
 衣川：遠藤旭佳 秋風故郷山：原田旭悠鳥
 屋島の誓：斎藤旭苑 茨木：和田田秀 関ヶ
 原：井出旭明 本能寺：佐々木耶水 彰義隊
 粟田：西森旭生 鴨川の露：村上旭隆 石童丸：
 関田：小栗栖：白石旭優 青葉の笛：山口
 旭英 白虎隊：佐藤晃紘 西郷隆盛：外久旭
 好 実朝公：佐竹旭都 琵琶舞薩摩健児：
 浅田芦水・尺八・剣舞数氏

日本芸術琵琶 十月十九日(日)昼一時東京
 柏会十月例会 西新宿柏ビル六階。弾法：
 錦幽 須磨の春：近田邦雄 大原御幸：高田
 瑛水 仁科信盛：青木晴城 鉢の木：石田脩
 水 青山播磨：杉山旗水 新曲白虎隊：長谷
 川錦舟 小曲隆盛：山崎錦幽。以上研修を終
 り小宴後七時散会した。

一水会京都支部 十月二十六日(日)昼一時
 秋季演奏会 京都東山仁王門の本妙寺
 で東京本部、京阪同好団体員協賛出演で開催
 前日の天気予報では曇後雨というので案じて
 いたが此予報はガラリと外れて爽やかな秋晴
 れに恵まれ五時上々でプログラム通り演奏
 が進行し正人時終演、この間満員の聴衆は行
 儀よく静聴し途中退場する人も殆どなく気持
 ちのよい会であった。このあと関係者一堂に
 集り本日の成功を祝して乾杯した。吉野懐古
 1 渡辺浴水 山科の別れ：牧南水 紅葉狩：
 多賀帯水 常陸丸：馬場鴨水 坂崎出羽守：
 木下皇水 義仲最期：古谷寛水 竜の口：早

川幾水 川中島：田中敷水 新作小督：植村
 真水 堅田落：梅原旭濤 城山：平井春嶺
 戸隠山：木村蓮水 羽衣：荻野甲水。

琵琶と詩吟 十月二十六日(日)正午西宮市
 詩舞の会 立夙川公民館松下ホール、主
 催蓮水会(市文化祭参加)。金剛石：高原
 大和懐古：伊原・田中・木の宮 城山：真下
 村上・山下 会津白虎隊：吉田 湖水乗切：
 堀田・中野 吉野山懐古：崎誓水 青葉の笛
 1 川上：中野 本能寺：竹内優水 小督：吉山
 瞳水・山崎蘭水 菊水の旗：楊嶽水・反町紫
 水 掛合羅生門：酒田山本周水・池田青水・
 佐藤智水・絃荒井藍水 琵琶舞淀君：三浦蓮
 水・舞二人 羽衣：京都田中旭法・矢吹旭美
 津 耳なし芳一：会主三浦蓮水。外に詩吟詩
 舞十九題が上演され極めて盛会であった。

三位研修同志会 十月二十六日(日)昼一時
 十月例会 三鷹市上連雀公会堂。録
 音詩吟異国の丘：吟山崎錦幽・尺八坂本錦道
 菅公：八束一峰 城山：清水源城 小栗栖：
 伊藤磐水 旅順開城：下田戸桜丸 安宅の関
 1 坂本錦道 鶴の夢：伊集院鼓城 詩吟：伊
 藤友彦 青山播磨：杉山旗水 噺八月十五日
 1 西村属峻 外に酒井眺水女史。終って懇親
 宴に移り散会。次回は十一月二十三日(日)同所
 にて開催の予定。

錦古流藤城会 十月二十八日(日)朝九時半
 吟詠大会 群馬県藤岡市農業会館大ホ
 ール。独吟、合吟、連吟、剣舞等百題の外琵琶
 吟金剛石：十八人 同紅葉狩：九人 琵琶義
 士討入：会長四方田錦隆 同屋島の誓：宗家
 針谷錦古。以上盛会裡に終始した。

五洲会 十一月一日(日)夕六時東京上
 野本牧亭(五〇〇円)。白虎
 隊：真泉洲香 接待：荒川洲帆 横笛：山田
 洲鳳 西郷隆盛：前田洲月 湯陽江：桑名洲
 聖 吹雪の敵：松崎洲陵 松王丸：平井洲誠
 衣川：来賓金子旭昭 伊豆の御難：来賓宮原
 暉水。

一水会大阪支部 十一月二日(日)昼零時半
 秋季演奏会 大阪市立西区民センター。
 吉野山懐古：住田 月下の陣：増田 会津白
 虎隊：北村 木村重成：菊地 白虎隊：中山
 嬢水 城山：金寄靖水 俊寛：小西南水 井
 伊大老：養老駿水 雪晴：宮之原聖水 琵琶
 湖旅情：松岡玲水 川中島：佐々木寒水 琵琶
 奇縁：植田豊水 西郷隆盛：中西鏡水 本能
 寺：内田欽水 竜の口：木村蓮水 松の廊下
 1 中山鳳水 父乃木將軍：会主小川吟水 詩
 吟：本能寺：桃木耳水 新撰組：東憲水 弁内
 侍：来賓伊勢谷安江 菊水の旗：同反町紫水
 小栗栖：同木下皇水 舟弁慶：同山口速水。

三ツ和琵琶研究会 十一月三日(日)正午京
 第三回演奏会 都東山安井金比羅会館
 薩摩平井、筑前梅原、同矢吹の三氏門下で組
 織する演奏会で第一回第二回と比較して皆長
 足の進歩上達を示し、また舞台ズレのない
 真面目な熱演振りに好感が持たれ、二十二日
 二十曲。尚模範演奏は隅田川：矢吹旭美津、
 若き敢盛：梅原旭濤、彰義隊：平井春嶺三師
 で大向うを唸らせた。

十周年記念 十一月三日(日)昼名古屋中
 野本牧亭 企業福祉会館ホール、主催花
 友会。湖水乗切：菅沼穰水 河内の宿：坂井
 田孝水 竜の口：前田絹水 紅葉狩：大西弦

しました。
 さて、その際ちよつと気付きました事を、三
 三申上げさせて頂き、とるに足らぬ素人
 の言としておゆるしの程願ひ上げます。
 (一) 「マイク使用」は必要でないと思ひます
 が、各演奏の方々はすばらしい音量であ
 り、琵琶そのもの良さが却って「マイク」
 に毒されると存じます故に。
 (二) 演奏していらつしやる最中に会場で「お
 しゃべり」が絶えなかったのは残念でござ
 いました。静聴の旨ちよつとご注意遊ばし
 て下さいませんか。
 (三) いわゆる軍国的なものに避けていただき
 たいと存じます。二十一日にも一、二ござ
 いました。その文句等に我々戦中族は猛
 烈な拒否反応を抱きます。又現在、復活し
 つゝある軍国主義に、我が愛好する琵琶が
 一役買っているようにも存じられて、不安
 な気持ちになりました。
 以上数々の妄言お恕下さいませ。
 当日の数人の方々の名演奏ぶりが今も耳に
 残っております。次の演奏会をたのしみにし
 ています。益々御隆昌御健康を祈り上げま
 かしこ。(九月彼岸中の日・記)

官臨席のもとに日本実演家団体協議会中村歌
 右衛門会長から表彰の栄誉を担われた。

琵琶を愛しむ会 九月二十一日(日)昼神戸
 九月例会 高嶋時水氏宅で開催。桃
 木耳水：舟弁慶 野尻撰水：雪晴れ 田中敷
 水：川中島 浅見汀水：白虎隊 田中鯉水：
 敦盛 高嶋時水：新曲白虎隊。今般高嶋氏宅
 二階に立派な舞台付座敷を新築され和楽道場
 と命名の披露に一同集合、老翁の元老桃木耳
 水師が舟弁慶の全曲を三十五分間に亘り熱演
 一同を感激させた。

文化祭参加 十月十日(日)立川市
 琵琶演奏大会 中央公民館、立川市琵琶研
 究会主催。桜狩：十七人合吟 旅順開城：栗
 原雨竹 湯陽江：石黒錦歌 城山：清水源城
 常盤御前：木原綾子 戦艦大和：伊藤磐水
 扇の的：広瀬翠紅 山科の別れ：中村修水
 伊達政宗：水藤五郎 義士討入：村木桜柳
 別れの盃：小川吐水 松の廊下：坂井眺水

京都琵琶協会 十月十二日(日)昼一時会
 十月定期茶話会 員矢吹旭美津女史宅。長
 い残暑が漸く終って爽やかな秋晴れに伊吹正
 陽、馬場鴨水、戸田旭公、戸倉旭嶺、田中鵬
 水、梅原旭濤、安住旭康、矢吹旭美津、牧南
 水、古谷寛水、荒木旭媛、平井春嶺、植村真
 水の諸氏集合、二、三会員の研究演奏や芸談
 雑談に楽しい半日を送った。

鈴木流泉氏の 十月十八日(日)夕五時半
 名流琵琶演奏会 東京上野本牧亭。城山：
 桑折瑤泉 鉢の木：若林鶴山 吟詠泊天草洋
 1 中村菊峰 村上喜剣：加藤友水 新撰組：
 野崎暁水 大楠公：佐藤旭天紅 漢詩野山の
 幸：菅根悠光 恩警追分節：樋口禁水 名月
 逢坂山：会主鈴木流泉 吟舞母里：太兵衛：吟
 菅根悠光・舞永田咏渥 西郷隆盛：前田秋声
 安宅：山崎旭萃 足柄山：山本鶴声。会場割
 れんばかりの盛況であった。

高橋蘇水氏の 十月十八日(日)夕六時函
 吟詠琵琶発表会 館市民会館ホール。詩吟
 の独吟連吟二十四題の外琵琶母の教え：中村・
 佐藤 静の舞：背戸 月下の陣・義士討入：
 会主高橋蘇水氏の演奏があり盛会であった。

筑前琵琶会 十月十八、九日(日)両日朝
 全大会 十時大阪谷町九丁目府立中
 小企業会館。大阪旭会司会で昼夜四回に亘り
 華々しく開催。秋の長雨で第一日は相憎降り
 続いたが二日目は一日晴れ渡り日曜でもあつ
 たので聴衆も沢山来集し橋本家、松岡旭岡会
 長以下全国の精鋭達により全九十六曲が或は
 独演或は歌絃分離、又は他楽器との合奏、日
 舞併演などで女性の多い筑前琵琶会のことゝ
 てさながら百花りようらん感があり聴衆を
 喜ばせた。只一つ気になったのは演者控室
 が通路から丸見えのお粗末で、せめて出入口
 に幕でも張っておいて欲しかった。翌二十日
 は総会に続き懇親会が開かれた。